

はじめに



春の田んぼで、ゲンゲ（蓮華草^{れんげそう}）の冠を作って遊んだことがありますか？ カブトムシを探して、蟬時雨の降りしきる雑木林を歩いたことはありますか。これから、そのような里山の話をしたいと思います。単に里山の情景を懐かしみ、愛^めでるだけでなく、科学的な視点から里山を捉え、理解し、保全しながら、これからの社会の中で存分に活かしていく方法を、この本を通して皆さんと一緒に考えたいと思います。

里山という言葉は、1990年代を通して急速に日本社会に広がりました。意味はともかく、今では、ほとんどの人が知っている言葉ではないでしょうか。里山をタイトルに含む本も、幅広い

ジャンルで出版されるようになりました。ざっと調べただけでも、山歩きや旅行のガイド、動植物の図鑑、絵本。風景の写真集に、京都に暮らしたベニシアさんのような生活スタイルの本。絵画・写真・俳句といった芸術や庭造りの指南書。果ては話題になった『里山資本主義』（藻谷浩介ほか、角川新書）のようなビジネス書まであります。

こうした多くの本の著者や読者によって、里山のイメージは大きく膨らみました。多様になったとも言えます。それは素晴らしいことですが、この状況は同時に、そもそも里山とは何なのか、という点について理解を難しくさせてもいそうです。もちろん、この間にも里山の自然環境や文化に関する研究は進み、その成果を紹介する研究書や教養書も出版されています。しかし、その多くは大部だったり専門的だったりして、ハードルが高くと感じる人も多いでしょう。

そこでこの本は、2020年代の社会情勢や新しい研究成果を踏まえつつ、里山の自然環境に焦

点を当て、一冊でひと通りの理解ができることを目的としました。主に自然環境の理解を目指しますが、生態系や動植物のことだけでなく、社会的・歴史的背景も掘り下げ、さらに保全に関わる実践的内容も含めました。

想定する主な読者は、生態学や地理学など里山に関わる分野を学ぶ学生さん、理科教育や社会科学教育に携わる学校の先生、里山の現場で保全活動や地域づくりを始めようと考えておられる市民活動家や行政担当者、エコツーリズムや農業などの分野で里山と関連した新しいビジネスを検討されている起業家、そして、身近な場所で子どもたちと一緒に自然に親しむ時間を過ごそうと考えておられるお父さん・お母さんといった皆さんです。

1980年生まれの筆者は、身近にある里山の急速な消失と、里山という言葉の慌ただしい普及とが交錯する中で学生時代を過ごし、関心をもったことから、その観察と研究を始めました。大学に職を得てからも、里山（主にその中の水辺環境）

に注目し続けています。学問としての専門分野は地理学で、生物学ではありません。地理学は、地表面の様々な場所における、人と自然の関わりに注目する分野です。里山の研究にはびつたりの学問です。ただ、これまでの里山の自然環境に関する研究は、主には生態学や森林科学を中心とした、生物に関わる研究者たちによって行われてきた経緯があります。この点で、もしかすると、これまでの里山を紹介する本と比べて、観点が少し違うと感じられる部分があるかもしれません。こんな見方もあるのだと、新しい視点で里山を理解するきっかけになれば幸いです。

また、研究を続ける中で、様々な現場で保全活動に携わる機会をいただきました。東海地方における事例が中心になりますが、その中での経験も内容に反映させました。

この本が、里山を知りたい、守りたい、と願っている多様な世代の皆さんの一助になれば、心から嬉しく思います。